献血を重ねることと互酬性の予期

——聞き取り調査の結果から見る献血行為の一断面——

吉武 由彩*

近年献血者数の減少が問題となっているものの、社会学における献血の研究は少ない。献血をめぐっては、「将来自身や家族も血液製剤を使用するかもしれないから」という献血動機が語られる場合がある。これは互酬性を予期する語りである。他方で、この語りの背景には採血事業者などへの信頼があると考えられる。本稿ではこうした信頼について確認したうえで、献血者がどのように互酬性を予期するのか、その内容を検討した。

調査の結果、献血者は採血事業者、血液事業、血液の特殊性、他者の行為への信頼を持つことがわかった。互酬性の予期については、事故や怪我、病気や手術、漠然としたものとして、自身や家族が血液製剤を使用する場合があると語られた。献血したことによる血液製剤の優先還元を期待する場合や、血液以外の「贈与」を受けるという語りも見られた。この中でも、事故や怪我という語りは頻繁に聞かれたものの、実際はそのような場合にはあまり血液製剤は使用されない。現在「健康」な青壮年の献血者にとって、病気の場合はリアリティがなく、事故や怪我の方がリアリティがあることがうかがえた。他方で、血液製剤の使い道について充分に知らないまま、献血をくり返す場合があることがわかった。その背景には、採血事業者や血液の特殊性への強い信頼が確認された。献血者を増やすには、互酬性の予期だけではなく、特に採血事業者への信頼を高めていくことが重要だということを指摘した。

キーワード：献血、互酬性の予期、信頼

1 問題の背景

日本で初めて輸血がなされたのは1919年である(香西 2007: 145)。その後、血液を一旦保存し、検査を経て輸血する「保存血液」の利用が進められたものの、血液提供への対価として金銭を支払う「売血」によりその多くが集められていたため、輸血による肝炎が顕在化した。そのため、1960年代半ば以降、自発的な無償の血液提供である「献血」への移行が図られた。献血への移行期には、血液提供者やそ

* 福岡県立大学人間社会学部 yoshitake@fukuoka-pu.ac.jp

の家族が輸血を必要とした際に、優先的に輸血を受けられる「預血」が併用されていたものの、預血は1974年に廃止され、その後は献血制度のみが採用されている。

現在献血者の受け入れは日本赤十字社が行い、希望者は献血ルームや献血バスで献血できる。献血には採血基準があり、年齢や体重、健康状態などに関わる基準を満たした場合に献血可能である。病気の場合や、過去に輸血や臓器移植の経験がある場合、女性の場合は妊娠中や出産後半年間は献血できない。このようにして献血により提供された血液は、日本赤十字社や民間製薬会社において検査・加工されて各種「血液製剤」となり、医療機関からのオーダーを受けて供給され、患者の治療に用いられる。上記の一連の事業を「血液事業」という（厚生労働省 2019a: 2）。

血液事業をめぐるのは、これまで肝炎感染などの問題が起り、血液の安全性が問われてきた。他方で、近年献血者数減少が問題となっている。1980年代には献血者数は最も多く年間のべ800万人以上であったものの（日本赤十字社 1993: 55）、その後大きく減少し、2018年の献血者数はのべ471万人である（日本赤十字社 2019: 1）。このままでは2027年に約18万人の献血者が不足するという推計結果も出され、献血者数減少は喫緊の課題である（厚生労働省 2018）。

本稿ではこのような背景から、献血者数減少の問題を取り上げる。その際、血液独自の事情について考慮に入れる必要がある。血液製剤には使用期限があり、最も短いものは採血後4日間である。そのため、血液製剤の安定供給には、献血者の中でも、くり返し献血する人々を確保することが重要であり、献血推進の政策面でも、重点目標として「複数回献血の増加」（年度内に2回以上献血すること）が掲げられる（厚生労働省 2019a: 17）。加えて、「複数回献血の増加」は、血液の安全性の観点からも重要とされる（厚生労働省 2019b: 12）。献血により提供された血液は、感染症の検査が行われる。くり返し献血し、検査に合格している献血者に献血してもらう方が、より安全とされる。そこで本稿では、献血者の中でも、くり返し献血をする「献血を重ねる人々」に着目する。これらの人々はなぜ献血を重ねるのか。

2 先行研究の整理

2.1 日本の献血研究

社会学における献血や輸血に関する研究は、世界的に見ても多くはない（Healy 2006: 7）。数少ない研究も、輸血による肝炎感染などの血液の安全性の問題を背景に進められてきた。日本でも1960年代前半まで売血が採用され、輸血後肝炎感染率が高かったことから、血液の有償性／無償性と安全性をめぐる研究が展開されてきた（姫野 1984; 駒村 1997; 今井 2006）。近年では、1980年代の輸入血液製剤によるHIV感染の問題を背景に、薬害HIV問題をめぐる研究も重ねられる（輸入血液製剤によるHIV感染問題調査研究委員会 2009など）。

他方で、本稿の関心に基づき、献血者とは誰なのかに関する研究を見渡すと、その数は限られている。既存の知見を確認すると、献血者は男性や（男性72.6%、

女性 27.4%), 40 代に多い (10 代 5.6%, 20 代 15.3%, 30 代 17.3%, 40 代 28.2%, 50 代 24.2%, 60 代 9.3%) (日本赤十字社 2019: 8). 階層別では, 中収入層 (吉武 2015: 46) や, 高学歴, 高収入層 (駒村 1997: 198), 婚姻状況別では未婚の場合に多い (吉武 2015: 50). さらに, 献血者の中でも献血回数が多い人々は, 男性, 高学歴, 高収入層とされる (吉武 2017: 6-8).

それでは, 人々はなぜ献血をするのか, 献血動機については, やや古い調査ではあるものの, 全国調査の結果, 「自分の血液が役に立ってほしいから」 (51.5%), 「将来自分や家族などが輸血を受ける時に備えて」 (33.8%), 「血液の検査結果が自分の健康管理のためになるから」 (27.0%), 「血液が不足していると聞いたから」 (24.1%), 「過去に自分や家族などが輸血を受けたことがあるから」 (11.4%) と報告される (複数回答) (総理府 1990: 12). また, 献血者の中でも献血回数が多い人々へ聞き取り調査を行った研究によると, 家族や友人が血液製剤を使用した, 家族や友人が献血者である, 家族や友人が医療・福祉関係者である, などの献血動機が語られたという (吉武 2014: 27-9). 以上, 日本の献血研究を整理してきたものの, 研究は限られている. そこで, 次項で海外の献血研究を確認し, 本稿の視点を明確にする.

2.2 海外の献血研究

先に見たように, 海外の献血研究も多くはなく (Healy 2006: 7), 血液の安全性の問題を背景に進められてきた. 献血研究に先鞭をつけたのは R.Titmuss ([1970] 2002) であり, この研究も 1960 年代の肝炎感染の蔓延を背景に, 各国の血液事業を比較したものである. 海外の献血研究の中でも, 本稿の関心に基づき, 献血者とは誰なのかに関する研究を見渡すと, 欧米諸国でも典型的な献血者は男性, 中年 (30 代, 40 代), 高学歴だと報告される (Piliavin and Callero 1991: 4-7; Wittcock et al. 2017: 7). このような献血者像は, 前項で確認した日本の献血者像とも重なる.

献血動機については, 献血研究の中でも影響力のある研究とされる, Titmuss ([1970] 2002) を手がかりとしたい. Titmuss ([1970] 2002) では, 献血動機についてのまとめた分析もなされ, イギリスで初回献血動機の調査を行った結果, 40%以上の人々が利他主義, 互酬性, 家族の代理, 義務のいずれかに該当し, 3分の1が献血の個人的な依頼またはテレビでの一般的な依頼を受けて献血し, 6%が血液が必要と気づき献血すると指摘される (Titmuss [1970] 2002: 226-36). その後の欧米の研究でも, 献血動機は利他主義, 互酬性, 周囲からの依頼であるという報告もなされる (Oswalt 1977: 124; Sojka and Sojka 2008: 59).

上記の献血動機の分析の中でも, Titmuss ([1970] 2002: 215) がとりわけ強調するのが, 互酬性をめぐる議論である. 献血では, 献血者と受け手は互いに匿名関係にあり, 献血者は, 自身の血液の受け手である匿名他者からの直接の返礼は期待しない. 他方で, 献血者は, 社会の成員である匿名他者に血液を提供することは, 自身や家族も社会の成員として贈与を受けることにつながると考えているという.

実際に彼が実施した前述の調査でも、過去に輸血を受けたことから献血する場合や、将来輸血を受ける時に備えて献血する場合が紹介される。

日本でも「過去に自分や家族などが輸血を受けたことがあるから」や、「将来自分や家族などが輸血を受ける時に備えて」という献血動機が報告される（総理府 1990: 12）。このように、献血動機としての互酬性をめぐっては、過去に血液製剤を使用した場合と、将来的に血液製剤を使用する場合という、大きく2つに分けられる。そのうえで先行研究を振り返ると、必ずしも互酬性という用語が使われてはいないものの、過去に家族や友人が血液製剤を使用した人が献血すること自体はくり返し指摘されてきた¹⁾ (Titmuss [1970]2002: 134-9, 215, 228-9; Oswalt 1977: 127; Piliavin and Callero 1991: 11-2, 33-4, ; Healy 2006: 79; Busby 2010: 374-5; 吉武 2014: 27-8)。家族や友人の病気および手術の経験を語り、血液製剤の提供を受けて命を助けられたことから献血する場合や (Piliavin and Callero 1991: 11-2)、家族のように病気で困っている人を助けたいと思い献血する場合 (Busby 2010: 374-5) などが示される。

他方で、過去に家族や友人が血液製剤を使用した経験がないにも関わらず、将来的に血液製剤を使用すると回答する場合については、ほとんど研究が見られない。詳しくは後述するが、近接領域であるボランティア活動の研究では、「将来自分も世話になるから」といったボランティア活動の参加動機が、互酬性の「予期」として説明されることがある (藤村 1991: 88)。これを参考に考えると、将来的に血液製剤を使用すると語る場合は、互酬性の「予期」と表現できるだろう。それでは、献血者は献血動機としての互酬性について、「どのように」それを予期しているのか。先行研究では、「将来自分や家族などが輸血を受ける時に備えて」(総理府 1990: 12) という動機が報告されるものの、「どのように」それを予期しているのかについては詳述されることはない。しかし、その内容について精査して初めて、なぜ人は献血を重ねるのか、その一端を明らかにすることができるのではなかろうか。

献血では、採血基準の存在により、献血者は「健康」であることが求められる。「健康」で、かつ家族や友人に血液製剤を使用した人がいない人々が、自身や家族も血液製剤を使用する側の患者になるかもしれないと予期することは、それほど容易ではないかもしれない。献血における互酬性の予期とは、献血者が、現在の自らが置かれている状況とは異なる状況に置かれ得ることを予期しつつ、血液の提供を行うことを指す。そのような予期のあり方とは、献血現場に限らず、広くは、現代社会においても求められている意識のあり方ではないだろうか。加えて、あらためて考えると、過去に家族などが血液製剤を使用したことが献血を促すとわかったとして、血液製剤の使用経験は増やそうとして増やせるものではない。そう考えると、献血を重ねる人を増やすには、家族などが血液製剤を使用した経験がない人々による献血を増やすことも重要であり、これらの人々を対象とした研究も必要になる。このように考え、本稿では、互酬性の予期を分析視角として献血行為の分析を行う。

2.3 互酬性——ボランティア活動に関する先行研究から

互酬性は献血以外の研究領域でも論じられてきた。そこで、近接領域であるボランティア活動の先行研究からも互酬性について検討を加える。献血はボランティア活動と類似の行為なのかという疑問もあると思われる。しかし、海外の研究では、ボランティア活動や献血、寄付・募金について、自発的な時間や労力、血液、金銭の提供行為とまとめられ分析がなされる (Lee et al. 1999)。寄付・募金は献血同様に先行研究が少ないため、ボランティア活動の先行研究を参考にする。

ボランティア活動の先行研究では、互酬性は「1990年代以降のボランティア論において最も参照された概念」(仁平 2011: 379)とされ、ボランティア活動の参加動機として論じられてきた。ボランティア活動の中でも、特に住民参加型在宅福祉サービスの領域で論じられてきたという。住民参加型在宅福祉サービスの先行研究では、「互酬(性)」は「特定の主体間における規範化または制度化された資源の相互移転」(藤村 1991: 84)と定義されることがあり²⁾、福祉サービスの提供者(ボランティア活動者)は、将来自分も福祉サービスを受けることがあるからといった理由により、ボランティア活動をすると報告される(藤村 1991: 88; 宮垣 2003: 226-7)³⁾。このような参加動機は、互酬性の「予期」と表現される(藤村 1991: 88)。

さらに、ボランティア活動の先行研究からは、参加者が互酬性の予期を持つ場合、その背景には、福祉サービス提供団体などへの信頼があると指摘される。住民参加型在宅福祉サービスや献血をめぐることは、自身がボランティア活動や献血を行ったとしても、将来自身や家族が行為の受け手になれる保証はない。そのため、藤村正之(1991: 86)は、住民参加型在宅福祉サービスでは、互酬性を担保してくれるであろう福祉サービス提供団体や制度への信頼が背景にあると指摘する。宮垣元(2003: 50-69)も、福祉サービスでは情報の不確実性が存在するため、システム信頼が必要だという。

しかし、それだけではない。藤村(1994: 162-3)は、制度の存続には、福祉サービス提供者の確保が必要であり、人々が他者もサービス提供者になると信頼してボランティア活動に参加することにより、制度は支えられると指摘する。宮垣(2003: 58)も、社会的交換理論を参考に、福祉サービスには他者の義務履行への信頼が関わっているという。

住民参加型在宅福祉サービスをめぐる状況と、献血をめぐる状況は、必ずしも重なるところばかりではない⁴⁾。しかし、献血でも血液事業という仕組みが存在し、採血事業者として日本赤十字社が携わり、間接的に資源の相互移転が行われる。上記の先行研究の整理からは、互酬性の予期という観点からの分析に先立ち、献血者が持つと考えられる採血事業者や血液事業、他者の行為への信頼の分析が必要になることがうかがえる。海外の献血研究でも、互酬性という文脈での議論ではないものの、献血者が採血事業者や血液事業への信頼を持つことが報告される(Busby 2010: 378)。以上より、本稿では、献血者が持つと考えられる採血事業者や血液事

業、他者の行為への信頼について確認したうえで、互酬性の予期の具体的な内容を分析する。それにより、人々はなぜ献血を重ねるのか、その一断面を明らかにする。

3 調査概要

3.1 献血を重ねることについて

調査にあたり、本稿では献血回数により「献血を重ねる人」を設定する。献血回数何回でもって、「献血を重ねる人」と設定できるのか、献血に関しては統計データが少なく、献血回数のデータもほぼ存在しない（厚生労働省 2014）。そこで、年間献血回数の上限を手がかりとした。献血では、献血者の健康面に配慮し、献血の種類に応じて異なる年間献血回数の上限が定められ、最も多い成分献血は 24 回である（厚生労働省 2019a: 26）。これをもとにすると、献血を「50 回」するには 2 年以上献血を続ける必要があり、十分に「献血を重ねる人」と言えると判断した。ただし、献血回数は年齢が高い場合ほど多いと考えられ、他方で、10 代と 20 代では、献血回数 50 回はなかなか該当者がいないと考えられる。そこで、10 代と 20 代では献血回数 31 回以上は構成比が小さいこと（2.9%）が指摘されるため、「30 回」と設定した⁵⁾。このような設定の仕方には限界もあると考えられるものの、今回この回数をひとつの区切りとした。

3.2 調査概要

調査にあたっては、事前に調査依頼文書を作成し、九州地区の X 県赤十字血液センターの所長を訪問し許可を得た。調査では、調査日に一日中献血ルームに滞在し、献血ルームのスタッフの協力を得て、当日献血ルームを訪れた 50(30)回以上の献血者の紹介を受け、対象者の献血後に休憩スペースの隅などで聞き取りを行った⁶⁾。2013 年 1 月～4 月の間で合計 20 日間調査日を設定し、家族や友人に血液製剤を使用した人がいない献血者 45 名の紹介を受けた。その中でも継続して調査協力が得られたのは 10 名だった。この 10 名のうち互酬性の予期に関する語りをした 8 名を本稿では取り上げる（表 1）⁷⁾。8 名には 2013 年 1 月～2017 年 3 月にかけて、1 名につき 4～6 回、1 回あたり 30 分～2 時間半調査を行った。一部電話やメールによる調査も含む。調査では、半構造化面接にて献血動機、互酬性の予期、信頼などについて尋ねた⁸⁾。互酬性の予期については、献血動機を尋ねた際に対象者から自発的に語られる場合もあった。それに加えて、（献血された）「血液を自分が受け取ると思われますか」、「血液を家族が受け取ると思われますか」と尋ねた。倫理的配慮については、献血ルームのスタッフと調査対象者に調査主旨やプライバシーの保護について説明し了承を得た。なお、聞き取り記録は IC レコーダーで録音し後日書き起こした。本文中で対象者の語りを引用する際には、筆者の問いかけは〈〉と表記し、語りを省略する際は 3 点リーダー 2 つ（……）として表した。

本稿は対象者数が限られている点に課題がある。しかし、本稿の目的は、多くの

表 1 対象者の概要

ID	年齢	性別	献血回数	職業	婚姻状況
A	24	M	30	大学院生	未婚
B	27	M	30	専門学校生	未婚
C	35	M	209	会社員	有配偶
D	45	F	66	契約社員	未婚
E	48	M	98	自営業	未婚
F	49	M	116	自営業	離別
G	53	M	52	公務員	有配偶
H	65	M	170	退職（元会社員）	有配偶

（注） 年齢や献血回数は初回調査時のもの。

対象者による献血動機の概要を知りたいといったものではなく、互酬性の予期がどのように語られるのか、その具体的な内容を分析することである。この目的のため、対象者数は少なくとも、同一対象者に複数回調査を行うことが重要と考え、上記の調査方法を採用した。

4 献血を重ねることと互酬性の予期

4.1 信 頼

互酬性の予期という観点からの分析に先立ち、献血者が持つと考えられる採血事業者や血液事業、ならびに他者の行為に対する信頼について分析する。日本では採血事業者として日本赤十字社が献血者の受け入れを行う。対象者が語るのは、日本赤十字社への信頼である。

赤十字社って色々災害の時とか募金したり、ちゃんとしてる団体じゃないですか。世界にあるし。だからおまかせしてれば大丈夫って。……色々なところで貢献している信頼できる団体（D氏、2014年4月8日）。

B氏も「赤十字だからね。一応名の通ったとこやけん。わからん会社とかがしよったら、やらないやろうけど」、H氏も「信用して。世界的なものですからね」と語る。この時、世界的な団体であること、著名な団体であること、災害時の募金活動を実施していることが信頼の根拠となっている。赤十字は世界192の国と地域に広がる組織であり、日本赤十字社は血液事業以外にも災害救護、国際、医療、社会福祉などの各領域で事業を展開している（日本赤十字社2020）。これにより、信頼がなされていることがうかがえる。

血液事業に関しても信頼が語られる。

健康で出せる人は（血液を）出して、必要である健康でない人の所にいく。

その媒介として日本赤十字社があるんだったら、その仕組みは必要なんじゃないかな。俺が（血液を）提供してるのは、（血液事業の）大きな枠の中に放り込んで。……システム自体に意味があるわけで、その信用自体に意味がある（C氏、2017年2月23日）。

献血は血液事業という仕組みの中での提供行為であり、C氏は血液事業への信頼を語る。上記の語りからは、献血者は特定他者との直接的な互酬性を意識しているというよりも、血液事業という仕組みの中での互酬性と捉えていることがわかる。そして、「システムで考えたら、血液製剤になるんだったら日本全国どこにでもいける」（C氏）、「外国には無理でしょう。日本国内」（F氏）と語られ、日本社会の中での資源移転と捉えられている。海外の研究同様（Busby 2010: 378）、日本でも献血者が採血事業者や血液事業への信頼を持つことがわかる。加えて、「血液ってあんまり他に使い道がない」（A氏）、「血を悪用することってできない」（C氏）と、血液の特殊性に関する信頼に言及されることもあった。

他者の行為への信頼についても確認する。血液事業という仕組みが存在しても、他者による血液提供がなければ、将来的に自分や家族が血液製剤を使用することはできない。

今度は結局自分も悪くなった時には、誰かが（献血）したものを私が受けるわけでしょ。……自分も助かるし、家族も（H氏、2016年3月25日）。

必要な時には間違いなく（血液製剤が）供給されるだろうって。不足するとは考えたこともない。そこは過信したうえで、必要な時のために（C氏、2017年2月23日）。

ここでは、自分や家族が必要とした時には誰かが献血してくれると、どこか当然のこととして語られ、献血者は暗黙の裡に他者の行為への信頼を持つことがわかる。B氏も「献血はやっぱり多くの人がやってる。自分だけがやってるわけじゃない」と語る。先に献血は日本社会の中での資源移転と捉えられていることを確認したが、社会の中には自分の他にも献血者が多数存在し、自分や家族が必要とした時には助けてくれると捉えられている。

4.2 互酬性の予期

4.2.1 血液製剤を使用すること

前項では献血者の持つ信頼について確認してきた。本項では、互酬性の予期の具体的な内容について順に確認する。ただし、以下で語られる内容は、対象者がどれかひとつを語るというものではなく、複数の内容について語る場合がある。

まず、事故や怪我の場面で、自らも受け手（患者）になり得るということが聞か

れた。F氏は、バイクなど交通関連の趣味を持っているので、事故に遭いやすいと語る。

私たちは特にバイクとか乗ってるから、いつこう事故とか遭って、もしくは、
こう自分の身にふりかかることがあるかもしれん。あるじゃないですか。怪我
して、輸血とかはまだしたことないけど、大怪我はしたことあるからですね、
私も（F氏、2013年2月28日）。

他方で、事故や怪我という語りは、交通関連の趣味を持たない対象者でも見られ
る。A氏は以下のように語る。

事故とかで人の血をもらうことになるかもしれないから。一回輸血受けてし
まうと献血できないじゃないですか、だからその分もらうかもしれないから先
にやっとう（A氏、2013年3月8日）。

A氏以外でも、事故や怪我という語りは頻繁に見られた。「いつか大怪我した時
に必要になって、その時に輸血とかしたら、たぶんありがたいなって」（C氏）、
「事故で輸血を受けることがある」（D氏）、「いずれ自分が怪我した時に」（G氏）、
「交通事故に遭うかもわからない」（H氏）と語られた。

加えて、東日本大震災を契機として、事故や怪我という語りをする場合も見られ
た。G氏は「震災に（ボランティア活動に）行ってからですね、そういう思いが強
くなったのは」と語る。日本でも、G氏に限らず、東日本大震災の直後に献血ルー
ムに人々が列をなす様子が見られ、海外の研究でも、テロ事件の直後に献血者が増
加したことが指摘される（Healy 2006: 3）。大きな災害や事故、事件がきっかけと
なり、献血が促進される場合があることがうかがえる。

次に、献血者が将来血液製剤を使用すると語る時、病気や手術の場面で、受け手
になることが聞かれた（C, D, G氏）。

事故がひとつで、その次が、手術を要するような病気。頭の中に浮かぶのは
その2つ。……いつかは自分にも降りかかるんだろうな—という漠然とした
イメージ。だから、具体的ではないけど、確実性としては、長いことこれから
先生きてくんだから、どっかのタイミングで確実に訪れるんだろうなって。な
る可能性は、絶対あると思ってる。それこそね、人間の致死率考えたら100%
なんだから、今のところ。じゃあ、その前段階で手術もあるだろうし、病気も
する（C氏、2015年6月18日）。

C氏は「漠然としたイメージ」としながらも、人はいずれ死ぬことを考えると、
その前段階として手術や病気の可能性があると語る。さらに、C氏は自分、家族、

友人と人間関係を拡大して考え、血液製剤の使用を確実性の高いものとして捉える。

俺は輸血受けないかもしれないけど、家族とか親兄弟、妻子考えるとゼロってことはないよなって思う。俺自身でもたぶん受ける可能性の方が高いと思ってから、……俺自身が受けなかったとしても、(友人や知人も含めて)周りの人間受ける (C 氏, 2015 年 6 月 18 日)。

D 氏や G 氏も、病気の際に受け手になり得ると語る。D 氏もあまり具体的には意識していないものの、健康診断で良性のしこりがあると言われたことから、病気の可能性を語る。

〈血液を自分が受け取ると思われますか〉昔はピンときてなかったから、色んなこと。ただ、健康診断受けて、ちょっとなんかしこりがあるかも、良性だけどみたいに言われてるから、……なんとなく。なるだろうな。年取ったらとか病気したら (D 氏, 2014 年 4 月 8 日)。

同様の語りは G 氏でも見られ、「母が腎臓悪くしてた時期があったんで、その辺から思いが強くなった」と語られる。D 氏も G 氏も、自身や母が血液製剤を使用することはなかったものの、病気などの経験が血液製剤の使用を考える契機になったという。

上記では C 氏や D 氏の語りを確認した。そこで見られたのは、どこか漠然と血液製剤を使用する状況を語る姿であった。C 氏は「今健康だから、そういう状況ってのは想像しにくい」と語る。このような漠然とした語りは、複数の対象者から聞かれた (A, B, C, D 氏)。事故や怪我と語る場合でも聞かれ、A 氏も「深い考えとか全然なくて……(血液製剤を使用する)かもしれないかなぐらい」と語る。

また、預血制度(血液提供者や家族が優先的に血液製剤の提供を受けられる)は 1974 年に廃止されたものの、献血者が現在でも預血の意識を持つ場合がある。H 氏は 1960 年代から血液提供をしており、以下のように語る。

もしそういう風になった場合に、結局、治療受ける時の献血の量で、足りないとかね、そういうった時に、やはり多く融通してもらえるかな (H 氏, 2016 年 3 月 25 日)。

これ(献血手帳)も、血液センターに聞いたら、何にも役に立たないと。けど、全くこれがない人と比べると、これを見せれば、それだけ献血に協力してもらってるからっていう形で、私が優先してもらえる可能性はあるかも (H 氏, 2016 年 3 月 25 日)。

H氏は制度変更に関して全く知らないわけではないものの、「優先してもらえる可能性はあるかも」と献血手帳を大切に保管している。

4.2.2 血液以外の「贈与」を受けること

4.2.1では、血液製剤を使用すると語る場合について確認した。ただし、Titmuss ([1970] 2002)では、互酬性として、自身や家族も「贈与」を受けると説明され、その主要な例として血液の授受を取り上げたものの、必ずしも血液の授受に限定されていたわけではない。そこで、補足的な議論として、血液以外の「贈与」を受けると語る場合に言及する。E氏は以下のように語る。

〈血液を自分が受け取ると思われますか〉血液をもらうっていうことはほとんどないと思うんですけど、お菓子ももらったりジュースももらったりしてるし、この時間自体も、すごい自分にとっては、いい時間なんで。その時間はもらってる (E氏, 2013年2月18日)。

E氏は献血ルームでDVDを観ながら献血をして、お菓子を食べながら休憩することを「癒し」と表現する。他にも、「献血に行ったらっていう充実感もある。気が付いたら一日終わってるのは嫌だな」(D氏)と、充実感を語る場合もある。

また、より抽象的な意味合いで、献血をしていない人も「何か他の事で役に立ってる」と語られる場合もあった。

俺は健康だし、献血ができる人だから、その役に立てばいいと思うし。そうじゃない人は献血はできないけど、何か他の事で役に立ってるのかもしれないし。…… (そういうことが) 周って自分のところにきてる (C氏, 2015年6月18日)。

4.3 事故や怪我という語りをめぐって

4.2では、互酬性の予期の具体的な内容を確認してきた。対象者からは、事故や怪我、病気や手術、漠然としたものとして、自身や家族が血液製剤を使用すると語られた。預血の意識を持つ場合や、血液以外の「贈与」を受けるという語りも見られた。この中でも、本項では、対象者の半数以上で聞かれた事故や怪我という語りを取り上げて検討する。

本項で事故や怪我という語りを取り上げるのは、それが頻繁に聞かれる (A, C, D, F, G, H氏) からというだけでなく、実際には事故や怪我の場合に血液製剤が使われることはあまりないからである。血液製剤には「輸血用血液製剤」と「血漿分画製剤」がある。輸血用血液製剤は、がんなど病気の治療に大部分が使われ⁹⁾、血漿分画製剤は、やけどや重症感染症、血友病の治療に使用される (厚生労働省 2019a: 6)。それにもかかわらず、事故や怪我という語りが広く見られたのはなぜ

か。このことを考える際に、以下の語りが手がかりになる。C氏は、自身と親がともに血液製剤を使用する可能性があるとしつつ、その状況はそれぞれ異なると考えている。

自分の健康を過信しているだけなんだと思うけれども、そんな大きな病気になる予兆っていうのを今のところ感じたことがないから。だから、俺はなるとしたら、まず事故なのかなと思って。だけど両親は年だから病気なのかな(C氏, 2017年2月23日)。

献血は採血基準を満たした場合のみ可能であり、病気の場合や高齢の場合(70歳以上)はできないため、「健康」な青壮年層(20~50代)が主に行っている(日本赤十字社 2019: 8)。しかし、「健康」な青壮年層は、「今のところ」自分が「病気になる予兆」を感じていない。そのような中、「健康」であっても、「いつどういうタイミングで事故に遭うかわかんない」(C氏)、「怪我する時はしちゃうので、自分が気をつけていても」(A氏)と語られる。献血者にとって、本来使用されることが多いがんなどの病気の場合はあまりリアリティがなく、実際はあまり使用されない事故や怪我の方が、まだリアリティがあるものとして捉えられている。

以上のように、事故や怪我という語りはリアリティの観点から分析できる。しかし、それだけではない。「若年層献血意識調査」では、「献血された輸血用血液製剤の使い道は、交通事故などの大量出血時よりもがんなどの病気の治療に使われることが圧倒的に多いことを知っていますか」(厚生労働省 2011: 79)と尋ねている。その結果、「知らない」割合は、献血者では65.3%、献血未経験者では81.6%と高い。同様の質問を今回の対象者8名にしたところ、4名は「知らない」と回答し、この4名全員が事故や怪我と語った(A, D, F, H氏)。

このような場合について、海外の研究を参考に考えたい。H. Busby (2010: 376-9)は、本稿のように互酬性という文脈での研究ではなく、事故や怪我という論点の提示もないものの、献血者は血液事業の詳細な状況や血液製剤の使い道について十分に知らないことを指摘し、その背景には採血事業者への信頼が関わっているという。日本の場合はどうだろうか。上記の「若年層献血意識調査」と同様の質問をしたところ、H氏は以下のように語る。

(輸血用血液製剤の使い道は) 知らないです。あと(献血後)はもう、赤十字さんの方におまかせして。どう使われようと。取ってしまったものですから。信用して。世界的なものですからね(H氏, 2013年1月7日)。

D氏も「(輸血用血液製剤の使い道は) 知らないですね。……赤十字だからおまかせして」と語る。海外の研究と同様(Busby 2010: 376-9)、採血事業者への強い信頼が語られた。加えて、以下の語りも見られた。

今まで 30 何回献血して、その血液がどう扱われているのかすら考えたこと
ないです。……献血した後はどうぞご自由に使ってください。そこはやっぱり、
寄付してお金という形になってしまうと使い道が多すぎる。でも血液ってあん
まり他に使い道がない（A 氏、2013 年 11 月 17 日）。

F 氏も「募金はどう使われるかわからない。……でも（献血は）そこまで突き詰
めて考えてなかった」と語る。献血者が血液製剤の使い道について十分に知らない
ことには、血液の特殊性に関する信頼も関わっている。

5 考 察

献血を重ねることについて、互酬性の予期の観点から分析を行った。その際、ボ
ランティア活動の先行研究の整理より、互酬性の予期の背景には信頼が存在するとい
う仮説のもと調査を行った。その結果、献血者は採血事業者、血液事業、血液の
特殊性への信頼を持つことがわかった（4.1）。人々は互酬性の予期を持つとしても、
信頼できない組織や制度に対して提供行為を行うことはないだろう。さらに、献血
者は他者の行為への信頼を持つことが確認された。献血者は、自身や家族が血液を
必要とした時には、誰かが献血をしてくれると暗黙の裡に捉えていた。この時の信
頼とは、特定他者への信頼というよりも、社会における一般的な他者への信頼であ
ることがうかがえた。献血の場合も、互酬性の予期の背景には、採血事業者や他者
の行為などへの信頼が見られた。献血者を増やすには、互酬性の予期だけではなく、
上記の信頼を醸成していくことも必要だろう。

次に、互酬性の予期の具体的な内容を検討した（4.2）。その結果、「ずれ」の存
在が確認された。献血者が互酬性の予期について語る時、そこには、実際の使用状
況とのずれ（事故や怪我）や、実際の仕組みとのずれ（預血）が見られた。この中
でも、事故や怪我という語りについて考える（4.3）。この語りが見られたのは、ひ
とつには、「健康」な青壮年の献血者にとって、病気よりも、事故や怪我の方がリ
アリティがあるからである。他方で、血液製剤の使い道について十分に知らないま
ま、事故や怪我と語る場合も見られた。先行研究とは異なり（厚生労働省 2011;
Busby 2010）、今回の対象者は献血回数が多い人々である。血液製剤の使い道につ
いて十分に知らないままでは、提供行為を続けるのは難しいのではないかと思われ
る。しかし、採血事業者や血液の特殊性への強い信頼があれば、献血をくり返すこ
とができることがわかる。言い換えれば、人々は必ずしも互酬性の予期だけで献血
するのではない。時に認識のずれを含んだ互酬性の予期を、採血事業者などへの信
頼が大きく支え、献血が重ねられる。

では、血液製剤の使い道について十分に知らないまま、採血事業者への信頼によ
り献血を重ねる人々について、どのように評価できるか。血液製剤の使い道につ
いての詳細な情報を必要としない献血者のあり方は、積極的に評価できる面もある。

過度に情報公開を進め、ある献血者の血液が実際に誰にどのように使われたのかが明らかになることは、患者側に不利益を生じさせかねないからである。贈与研究が明らかにしてきたように、贈与は時に受け取った者を貶め、贈り手と受け手の間に上下関係を生み出す (Mauss 1950=2009: 108-9)。Titmuss ([1970]2002) も贈与研究を参照し献血の分析を行ったが、献血した血液の個別具体的な使用先が明らかになることは、患者側のプライバシー侵害の問題だけでなく、献血者と患者の間に上下関係を生み出すことにつながりかねない。

他方で、こうした献血者のあり方には課題もある。献血者が語る採血事業者への信頼について確認すると、献血者は著名な団体だから、世界的な団体だからということ信頼の根拠としているものの (4.1)、採血事業者による血液事業の内容について十分に理解したうえで、信頼するという判断をしているわけではない。そのような意味では、上記の献血者のあり方とは、実は根拠の弱いあいまいな信頼の上に成り立っている側面もあり、それゆえに、献血者による採血事業者や事業内容へのチェック機能が十分に働いていないという課題も有しているだろう。

このような課題もあるものの、今回の事例からは、献血者を増やすには、採血事業者への信頼を高めることが重要だとわかる。どのようにして信頼を高められるのか。事例に戻り考えると、対象者は信頼の根拠として、採血事業者が血液事業以外にも災害時の募金活動をしていることを語る (4.1)。災害救護、国際、社会福祉など、他領域の活動実践からも、採血事業者への信頼は形成され得る。献血の広報誌で他領域での活動実践を紹介するなど、領域横断的な活動実践紹介を促進する方法もあるだろう。加えて、信頼研究が明らかにしてきたように、システムに対する信頼は「アクセスポイント」(Giddens 1990=1993: 107) を必要とする。献血でも、採血事業者への信頼は、献血ルームでの採血事業者のスタッフとの「顔の見えるコミットメント」(Giddens 1990=1993: 107) に支えられている部分があるだろう。献血ルームの事務スタッフ、看護師、医師による献血時の説明、技能、態度が、採血事業者への信頼の一端を形づくると考えられる。他方で、献血ルームのスタッフの態度などから形成される信頼も、実は同様に根拠の弱い信頼だという可能性もある。献血者は増えても、献血者は血液事業の詳しい内容は知らないままということも考えられ、こうした限界は心に留めておく必要がある。

今回献血における互酬性の予期について研究を行った。本稿は献血の実証研究である。と同時に、2 節でも言及したように、献血における互酬性の予期のあり方とは、広くは、人々がいかに現在の自らが置かれている状況とは異なる状況に置かれ得ることを予期できるのかという問いにもつながる。現代社会では人々の間の多様性が増大しているとされる。そのような中、こうした予期のあり方を通して、自らと異なる立場にある人々と連帯していくことも重要だろう。このような観点から考えた時に、人々は「ずれ」を含みつつ、他方でまさに異なる状況に置かれ得ることを予期する場合があります。そうした方法には可能性とともに課題も見出せることを確認してきた。

また、互酬性の予期の特徴は、上述のずれだけではない。献血者は、受け手との間に何らかの「共通項」を意識し（交通関連の趣味、人はいずれ死ぬこと）、自身や家族も受け手になると、異なる状況に置かれ得ることを予期する場合もある(4.2)。さらに、物事を拡大して捉え、受け手になると予期する場合も見られた。人間関係を拡大し、周囲の誰かが受け手になると予期する場合や、血液以外の「贈与」へ拡大し、受け手になると考える場合が見られた。共通項の設定や物事を拡大して捉えることも、献血を促進すると考えられる。しかし、現在の献血推進政策では、献血者やその家族も受け手の立場になり得るという、献血者と受け手の両者の共通項を明示する形での広報はなされていない。今後は両者の共通項を明示する形での広報を実施する方法もあるだろう。その際、どのような共通項の設定が効果的なのかについては、今後調査対象者数を増やす中で分析する必要がある。

再度言及するならば、互酬性の予期のあり方は、それだけで献血を支えているのではなく、その背景には信頼がある。今回特に採血事業者への信頼について考察したものの、信頼には他者の行為への信頼もある。他者の行為への信頼がいかに形成されるかは今後の課題であり、追加調査も行う中で分析を深めたい。最後に、本稿は限られた対象者への調査によるものであるため、今回の知見をすべての献血者に一般化できる保証はない。加えて、互酬性の予期という観点から献血行為の一断面を分析したにすぎず、献血行為のすべてを説明できるものではない。

【付記】 本稿は日本学術振興会の研究助成（特別研究員奨励費、若手研究 B）による成果の一部である。

【注】

- 1) 他方で、過去に家族や友人が血液製剤を使用していない人々の問題は吉武（2020）で論じている。
- 2) 先行研究（藤村 1991, 1994）は「互酬」と「互酬性」を分けていないため、本稿も区別していない。
- 3) 献血やボランティア活動の先行研究では、参加動機として「互酬性」が論じられることが多いため、本稿も参加動機として互酬性を論じる。ただし、この背景として、ボランティア活動における資源配分の形式が互酬構造となっていることが指摘される（藤村 1994: 151）。互酬性をめぐっては、参加動機の分析だけでなく、その構造に関する分析もあり得る。
- 4) 住民参加型在宅福祉サービスは会員制であり、少額の貨幣報酬が存在する。献血は会員制ではなく、貨幣報酬はない。
- 5) 10代と20代のみ献血回数の分布が示されている（厚生労働省 2011: 124）。
- 6) 献血者は個人の都合の良い時に都合の良い場所で献血する。そのため、名簿に基づき無作為抽出を行うことはできないものの、献血ルームの特性に応じた実現可能な調査方法を選択した。
- 7) 残りの2氏に互酬性の予期について尋ねたところ、「思わないですね、全然。大体手術でそんな輸血を使うってこと自体も全然考えてなくて」（47歳女性）、「病気や怪我は無いようにしたいんだけど、そういう考えはあんまりない」（60歳男性）と語られた。両氏とも人を助けたいという動機から献血を続ける。

- 8) 主な質問項目は、属性、献血関連（献血歴、献血動機、互酬性の予期、信頼）、生活史（家族、近隣、友人関係）である。
- 9) 輸血用血液製剤は、悪性新生物 37.8%、血液および造血器 19.5%、循環器系 15.6%、消化器系 6.9%、損傷、中毒および外因 2.7%に使用される（東京都福祉保健局 2018: 4）。

【文献】

- Busby, H., 2010, "Trust, Nostalgia and Narrative Accounts of Blood Banking in England in the 21st Century," *Health*, 14(4): 369-82.
- 藤村正之, 1991, 「互酬的關係性の形成とその内実——住民参加型在宅福祉サービスにおける利用と提供の相互作用過程」『総合都市研究』42: 83-96.
- , 1994, 「在宅福祉サービスの存立基盤」針生誠吉・小林良二編『高齢社会と在宅福祉』日本評論社, 137-71.
- Giddens, A., 1990, *The Consequences of Modernity*, Cambridge: Polity Press. (松尾精文・小幡正敏訳, 1993, 『近代とはいかなる時代か? ——モダニティの帰結』而立書房.)
- Healy, K., 2006, *Last Best Gifts: Altruism and the Market for Human Blood and Organs*, Chicago: University of Chicago Press.
- 姫野侑, 1984, 「日本における血液事業と献血」『東京経大会誌』139: 63-90.
- 今井竜也, 2006, 「献血におけるサンクションとインセンティブ——血液政策・供血システム転換の可能性と必要性」『保健医療社会学論集』17(1): 51-62.
- 駒村康平, 1997, 「ボランティアと市場、政府の関係——血液事業を例にして」『季刊社会保障研究』33(2): 191-208.
- 厚生労働省, 2011, 『平成 23 年 若年層献血意識調査結果報告書』（2019 年 11 月 24 日取得, <http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001vyxk-att/2r9852000001vz2o.pdf>）.
- , 2014, 「平成 26 年度第 2 回血液事業部会献血推進調査会資料議事録」（2019 年 11 月 24 日取得, <http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000071521.html>）.
- , 2018, 「平成 29 年度第 3 回血液事業部会献血推進調査会資料」（2019 年 11 月 24 日取得, <https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000201811.html>）.
- , 2019a, 『血液事業報告 平成 30 年度版』（2019 年 11 月 24 日取得, <https://www.mhlw.go.jp/content/11127000/000488652.pdf>）.
- , 2019b, 『けんけつ HOP STEP JUMP（生徒用）（2019 年度版）』（2019 年 11 月 24 日取得, <https://www.mhlw.go.jp/content/11120000/000474945.pdf>）.
- 香西豊子, 2007, 『流通する「人体」——献体・献血・臓器提供の歴史』勁草書房.
- Lee, L., J.A. Piliavin and V.R.A. Call, 1999, "Giving Time, Money, and Blood: Similarities and Differences," *Social Psychology Quarterly*, 62(3): 276-90.
- Mauss, M., 1950, *Sociologie et Anthropologie*, Paris: Presses Universitaires de France. (吉田禎吾・江川純一訳, 2009, 『贈与論』筑摩書房.)
- 宮垣元, 2003, 『ヒューマンサービスと信頼——福祉 NPO の理論と実証』慶應義塾大学出版会.
- 仁平典宏, 2011, 『「ボランティア」の誕生と終焉——〈贈与のパラドックス〉の知識社会学』名古屋大学出版会.
- 日本赤十字社, 1993, 『血液事業の現状 平成 4 年統計表』.
- , 2019, 『血液事業の現状 平成 30 年統計表』.
- , 2020, 「赤十字について」（2020 年 3 月 7 日取得, <http://www.jrc.or.jp/about/>）.

- Oswalt, R.M., 1977, "A Review of Blood Donor Motivation and Recruitment," *Transfusion*, 17(2): 123-35.
- Piliavin, J.A. and P.L. Callero, 1991, *Giving Blood: The Development of an Altruistic Identity*, Baltimore: Johns Hopkins University Press.
- Sojka, B.N. and P. Sojka, 2008, "The Blood Donation Experience: Self-reported Motives and Obstacles for Donating Blood," *Vox Sanguinis*, 94(1): 56-63.
- 総理府, 1990, 『献血に関する世論調査 (平成2年)』.
- Titmuss, R., [1970]2002, *The Gift Relationship: 1970*, Palgrave Macmillan archive ed., Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- 東京都福祉保健局, 2018, 『平成29年 東京都輸血状況調査集計結果 (概要)』 (2019年11月24日取得, https://www.fukushihoken.metro.tokyo.lg.jp/iryo/k_isyoku/yuketsutyousakekka.files/29gaiyo-2.pdf).
- Wittock, N., L. Hustinx, P. Bracke, and V. Buffel, 2017, "Who Donates? Cross-country and Periodical Variation in Blood Donor Demographics in Europe between 1994 and 2014," *Transfusion*, 57(11): 2619-28.
- 吉武由彩, 2014, 「非対面のボランティア的行為と想像力の問題——多回数献血者への聞き取り調査の結果から」『西日本社会学会年報』12: 21-35.
- , 2015, 「献血行動の規定要因分析——社会階層および社会関係との関わりから」『下関市立大学論集』59(2): 41-57.
- , 2017, 「多回数献血の規定要因分析」『下関市立大学論集』60(3): 167-84.
- , 2020, 「なぜ献血を重ねるのか——受血者不在の場合の献血動機と消極的献血層の動機変化」『福祉社会学研究』17: 159-80.
- 輸血液製剤によるHIV感染問題調査研究委員会, 2009, 『輸血液製剤によるHIV感染問題調査研究最終報告書「医師と患者のライフストーリー」第1分冊 論考編』ネットワーク医療と人権。
(原稿受付 2019.12.7 掲載決定 2020.9.24)

Repeat Blood Donation and the Anticipation of Reciprocity: An Interview Study

YOSHITAKE, Yui

Fukuoka Prefectural University

yoshitake@fukuoka-pu.ac.jp

The decreasing number of blood donors in recent years has been a critical concern. However, there are limited sociological studies on blood donation. Literature reviews show the consistent motivation for blood donation to be “my family and I might use blood products in the future.” This motive can be considered as an anticipation of reciprocity. Further, it can be assumed from this type of narrative that blood donors trust blood banks. Based on this premise, this study attempts to examine the trust blood donors place in blood banks, as well as their narratives of anticipation of reciprocity.

In their interviews, the participants described the trust they place in blood banks, blood services, specific functions of blood, and the actions of other members of the society. The participants also described their or their family members' hypothetical need for blood products in case of accidents and injuries, in the treatment of diseases, during surgeries, or by imagining vague situations. Other participants shared ideas about prioritizing donors in need of blood, or described reciprocity not through blood products but through other “gifts.” Among these motives, the anticipation of accidents and injuries was often mentioned; however, in reality, the use of blood products following an accident or injury is limited. For “healthy” young or middle-aged donors, illness does not seem to be a reality, while involvement in an accident seems more realistic. Furthermore, some repeat donors did not have much knowledge about the uses of blood products. The background narrative in these cases is the strong trust in blood banks and the specific functions of blood. This study indicates that in order to increase the number of blood donors, it is important to enhance not only the anticipation of reciprocity but also the trust in blood banks.

Key words: blood donation, anticipation of reciprocity, trust

(Received Dec. 7, 2019 / Accepted Sep. 24, 2020)